



## 駒ヶ根共立クリニック 院長 酒井 悠次 医師

アルプスの山々に囲まれ、大自然の息吹とともに発展してきた駒ヶ根共立クリニックに、6年前、地元出身の酒井悠次先生が赴任されました。長年にわたり埼玉医科大学で薬理学を教えたこられた基礎医学の専門家が、透析医療という臨床の現場でどのように溶け込んでこられたのか、そのご苦労やエピソードなどをうかがいました。

(聞き手・野村喜美子)

駒ヶ根共立クリニックは偕行会の中では二番目に古い透析クリニックとして1982年に開設、その後99年10月、今の場所に移転しました。駒ヶ根インターやJRの駅からも程近い場所に、中央アルプス、南アルプス連峰が一望できる自然環境に恵まれた立地です。ベッド床は30床、11月には7床増床の予定で、患者数は112人、地元出身の看護師さんが多いのも特徴です。酒井悠次先生は、2001年、偕行会長野理事長、駒ヶ根共立クリニック院長に赴任さ

合併症対策に力を入れる  
人脈の広いアイディアマン



れました。いろいろお話して分かったことは、大変なアイディアマンで情報通、その上、信州大学出身の強みを生かした人脈の広さです。

偕行会にこられるまでは埼玉医科大学薬理学教授でした。

「出身は長野県伊那市です。当時、地元には高齢の母と兄がいて、兄の体調が悪いため、大学を依願退職し、伊那市へ戻りました。しばらくトマトやスイカづくりに精出していたのが、たまたまご縁があって、当クリニックに再就職することになりました」。

基礎医学を教える側から、臨床の現場を持つ透析クリニックへ180度の転換です。

「院長になってからは分厚い本を何冊も読み、現場で透析を受ける方々といろいろ話したり、患者会にも積極的に顔を出すなど透析に関するさまざまなデータを集め



ました。幸い信州大の同窓生が周囲にたくさんいますから、何かと協力が得られるのは、ありがたいことです」。

最近の透析者の傾向などをうかがっていると、意外なお話が飛び出しました。

「高齢の透析者は頭が確かです。透析者は全体に高齢化してきています。ただ、透析を続けている人は、実は健康な人より頭がしっかりしているのです。若い人の相談相手になれるのだから自信をもって地域で助け合い、長生きしてほしい、気力が落ち込んでいる人を励ますのも私の役目です」。

合併症対策に対しても造詣が深く、積極的な姿勢を打ち出されています。

「いろんな資料を読んでいます、確かに名古屋共立病院の合併症対策はレベルが高いです。合併症対策の小冊子も出ましたが、とてもいいことですね、透析は先進的医療です。スタッフや看護師も技術向上が求められますし世の中の流れも知ってもらわなくてはなりません。当クリニックも本院から技士を派遣してもらいエコー検査などをしてもらっています。地域の病診連携で合併症のスクリーニングは基幹病院でやってくれるようになると思います」。

検査するだけでなく治療までもやってほしいと、いろいろと調べているところ」。

地域の透析クリニックとしての今後の課題を5つにまとめていただきました。

「透析の質の確保、そのためには患者の数を増やして経営的な収益を上げなくてはなりません。第二にスタッフの質と人数の確保、これがないと安定的に維持できません。もちろん働きやすい職場作りも大切です。三番目に先ほど述べたように合併症の病診連携を進める、四番目は透析あとの回復室の必要性。これはまだ合意が得られていません。最後に今秋スタートの障害者自立支援法を透析患者にどのように役立たせるかについて、今、検討してます」。



(左から)五十川事務長、浦野主任看護師と酒井院長は毎日のように打ち合わせをする。

### 略歴

酒井悠次(さかい ゆうじ) 医師

信州大学医学部医学科卒、同大付属病院で一年臨床研修の後東大医学部薬理学研究生となる。ドイツゲッチンゲン大学薬理学および毒物学教室へ3年間留学。東大医学部に戻り薬理学研究生となる。73年(昭和48年)から埼玉医科大学へ、2000年に依願退職。長野県伊那市出身。趣味は学生時代から続けている囲碁とテニス。